

## 江南市の歴史散策

ふるさとガイドボランティア養成講座の、先進地研修で江南市を訪ねた。見学も楽しみであり、江南のボランティアガイドとの交流も予定されている。

### 江南市について

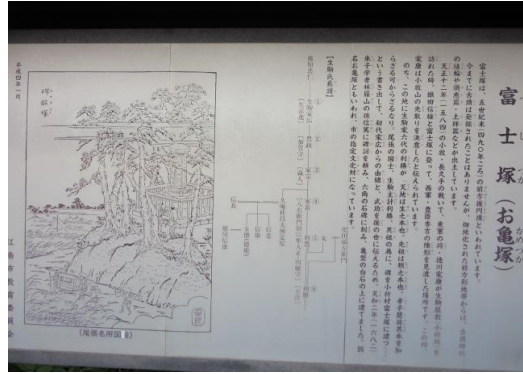
江南市と聞いて思い浮かべるのは、藤の花で知られる曼陀羅寺くらいのもの。事前に調べてみると、場所は岐阜県との県境となる木曾川の南に面している。名鉄犬山線が南部から中央部に向かい、国道 155 号が南部を横切っている。大きな川は木曾川、五条川、日光川、青木川が流れ、一宮市、岩倉市、小牧市、大口町、扶桑町に隣接し、岐阜県の各務ヶ原市にも隣接している。

江南市は [1954年6月1日](#) に、[丹羽郡古知野町](#)・[布袋町](#)、[葉栗郡宮田町](#)・[草井村](#)の 3 町 1 村が合併して発足した。いわゆる「昭和の大合併」で結成された市である。古来中国では大きな川を「江」と呼んでいたと言う故事より、大きな川木曾川の南に位置することから、当時の愛知県知事の命名により「江南市」となった。

現在の人口は 99,000 人、市の木はくろがねもち、市の花は藤、歴史上の人物としては次の人たちが挙げられる。(江南市郷土史研究会資料より)

- \*生駒利豊…秀吉より小折村千 5 百石 後 4 千石賜る
- \*生駒親正…初代高松城主 17 万石賜る
- \*生駒吉野…織田信長の側室。信忠、信雄、五徳の母
- \*織田信忠…信長の嫡男 岐阜城主
- \*織田信雄…信長の二男、清州城主百万石賜る、信勝の末裔が現在に続いている
- \*五徳…信長の長女。徳川家康の嫡男松平信康に嫁ぐ
- \*浅野長政…文禄 2 年甲斐の国 22 万 5 千石を賜る
- \*蜂須賀家政…幼名小六、徳島藩祖 25 万石を賜る
- \*前野将右衛門…豊臣秀次後見役、但馬守出石城主 10 万 5 千石を賜る

小牧長久手の戦いを偲ぶ場所に「富士塚」



富士塚と説明板

まずは予定通り 10:00 に名鉄布袋駅に立ち寄り、江南のガイドさんと合流して富士塚に向かう。バスを降りて建物の裏手に回ると、大きな木がそびえている場所が富士塚だった。楠ではなかったのて榎かな？ かなり大きな木が林立していた。説明板もありそこには、ここが古墳であったことと尾張名所図絵に描かれた、当時の富士塚も描かれていた。



それによると、490 年ころの前方後円墳と言われているが発掘されたことはないと言う。が、古墳時代の埴輪や須恵器・土器などが出土しているという。

この場所が歴史上知られることになったのは、天正 12 年(1584)小牧・長久手の戦いで徳川家康が織田信雄とともに、この富士塚に上り敵状を視察したことにある。説明を聞きこの塚に上って見ると、かなたに小牧城が見えるのだ。建物がなかった昔ならなおさらよく見えたことだろう。この石碑は後に六代生駒利勝が天和 2 年(1682)に、生駒家の由緒と武勲を残すためにと建立したもの。その碑文は林羅山の孫・信篤に碑詞

を依頼したもので、六角の石碑に刻み、それを亀型の台石に立てたものです。そのためお亀塚とも呼ばれています。確かに石碑は亀の背中に乗っていて、碑文の上には龍が彫られている。亀は千年万年も長生きすると言われることから、生駒家の繁栄の願いをこめているものと思う。(中国では石碑を亀の背中に乗せたものが多いです)

## 生駒家の宝頂山墓地

富士塚を後にして大型バスは田んぼ道?を走り、狭い道で切り返しを行いながらやっとの思いで右折する。すると車内からは思わず拍手が沸いた、さすがプロの運転手。10分程で到着しバスを降りると、目の前に小さいヒマワリ?がたくさん咲き誇っている。そのヒマワリの花の上にちょこんと二つ墓石がのぞいているのが見えた。



花に囲まれた墓地



中央が生駒家の子孫の方

入口には教育委員会の説明板があり、隣には写真入りで「生駒家の宝頂山墓地・墓石配置と碑文案内」の説明板もあった。ガイドさんが話しを始めるとすぐに一人の若い男性を紹介した、サンダル履きのいでたちの青年はこの生駒家19代のご子息とのこと。腕には歴史ガイドの腕章をつけている、その青年が説明を始めるとはっきりした口調で分かりやすい、話の端々からはこの地域の歴史を研究しているらしいことがうかがえる。

江南の生駒氏は引き続きこの地にとどまり、ご先祖様をお守りしているが、東浦の水野氏は東浦にはおらず東京住まいと言う。昔のこととはいえ、殿様の子孫がその地で生活していることは、間違いなく歴史が続いていることを感じさせる。昔の殿様が今も住んでいる、住んでいないの違いは歴史を語り伝えるうえで大きな違いがあると感じた。

### 「家型の廟」生駒利豊の墓

肝心の説明だが、「生駒家の宝頂山墓地」一帯は生駒家五代当主利豊の隠居所で、この付近に住んでいたと言う。利豊は年老いてから生きながらにして成仏したいと願って、その日を誕生日と決めて断食し、水を飲むだけの生活に入ったが望みはかなえられなかった。六代当主利勝はその心情を思い、年豊夫妻を住居にふさわしい石廟形式の墓を作って葬ったもの。それに四代当主家長夫妻の五輪塔を併せて祀り、後世になって十代当

主周房の墓碑が加えられている。お墓は正面に利豊夫妻の家型廟が二つ並び、その右手に四代家長夫妻の五輪の塔が二つ、左手には十代周房の墓碑がある。初めに触れたようにお墓は農道脇にあり、たくさんの小さなヒマワリの花に囲まれていた。

以上が教育委員会の説明内容で、「生駒家の宝頂山墓地・墓石配置と碑文案内」の説明板には、ここに登場する生駒家当主の説明があります。それによると…

\*生駒利豊……家型の廟には利豊の武功が刻まれている。一方、多くの和歌を残している

1590年 小田原征伐 奥州征伐

1600年 関ヶ原の戦い 先方隊として宇喜多秀家の小姓頭を討つ

1614～1615年 大阪の陣 先陣が崩れる中踏みとどまり奮戦

\*遠山婦人(利豊の妻)…苗木城主(岐阜県中津川市)遠山友政の長女。夫人の廟には次の二人のことも刻まれている

徳姫…家康の長男信康の妻(信長の長女)、京都に行くまで生駒屋敷で過ごした。

織田秀信(幼名三法師：こちらの方が有名)…信長の孫、岐阜落城後生駒屋敷に立ち寄り、後高野山へ送られる。

\*生駒家長……生駒家四代目で、小口の戦い、浮野の戦い、金ヶ崎の戦いで武勲をあげる。妹が織田信長に嫁いでおり、信長が信頼していた家臣の一人。姪の徳姫が興入れた際に家康から歓迎の意として「一休禅師の掛け軸」と「名刀」を直接手渡し、頂戴していることから家康の信頼も厚かったと考えられる。

\*生駒周房……彼の代の時領地が加増されて4,000石となりました。また、生駒家として尾張藩家老になった人です。江戸詰の際には元高松藩主とも親交を深めた。



生駒利豊の家型廟



四代家長夫妻の五輪の塔

奈良から来た生駒氏が築いた小折城

次は5分程移動して生駒屋敷跡に向かう。生駒氏の居城「小折城」のあった所、今は布袋東保育園が隣にあって子供たちのにぎやかな声が聞こえている。立派な石碑と説明板があって、それによると生駒氏は奈良の生駒山のふもと谷口村に住んでいましたが、応仁の乱（1467～77）で戦乱が続いたので、尾張の小折に移り住んだという。生駒氏は染物の原料、油を商う運送業で財をなし大きな勢力を持つようになり、そして、三代家宗の娘吉乃の方が織田信長の室となり、信忠、信雄、五徳の二男一女を生み、織田家に対して重要な位置を占め、尾北の豪族として小折に城をかまえました。



生駒屋敷が織田・豊臣時代の歴史的舞台として注目されるようになったのは、この時代に織田信長や豊臣秀吉の参謀役として働いた、前野氏の子孫が編纂した「武功夜話」が世に出たからです。その内容はこれまでの歴史的事実を塗り替えるものであり、信長や秀吉が天下制覇の第一歩を踏み出したのが、この生駒屋敷でした。秀吉は子供の頃日吉丸と言い、矢作橋の上で蜂須賀小六に会ったという説に対して、そうではなく生駒屋敷をおとずれて蜂須賀小六の配下になります。その時、信長の室「吉乃の方」のとりなしで信長の下僕に拾い上げられたと書いています。



この説は初めて知りましたが歴史の事実は何が正しくて、何が正しくないかの判定は、これが基準というものがないだけに難しい。

つまり、歴史に絶対はなく私の決め言葉である「誰が見たのか」ということになる。もっともそれだから夢があると言えるのかも。

さらに、次のように続けています…永禄3年(1560)桶狭間の合戦の奇襲、西美濃攻めの戦略はこの地で練られ、蜂須賀小六や前野将右衛門によって国の情報を集め、戦いの費用は生駒家長によって賄われました。永禄6年(1563)小牧山築城に始まる尾張北部の平定で、藤吉郎は鉄砲足軽百人組の頭にと頭角を現してきました。信長の天下布武への道はこの屋敷を起点とし、太閤秀吉の天下人への62年の生涯も、この屋敷の一角から大阪城へと引き継がれていきました。

東浦の私たちが、村木砦の戦いや尾三同盟に水野家がかかわり、織田・徳川の両雄が勢力を伸ばし後の徳川幕府を支えたという考え方から、水野家が果たした役割を評価しています。これと同じように江南のみなさんも、地域の歴史を研究し地元の生駒家の働きを評価していると思いました。

## 生駒家の菩提寺「嫩桂山久昌寺」

生駒屋敷から歩いて久昌寺に到着、本堂前の広い庭は砂利が敷かれているが通り道だけ舗装されている。そこに街路灯が1本立っているのだがこれがいけない、その姿がお寺さんの雰囲気壊している。でも、本堂左手には百日紅の赤い花が咲いていて落ち着く。久昌寺は曹洞宗で大本山総持寺の直末、山号を「嫩桂山(どんけいざん)」という。最初は至徳元年(1384)禅喜寺を草創、途中で龍徳寺と改名、生駒氏が大和より移住した時開堂し、菩提寺としました。三代家宗の時代に吉乃の方が信長の室になり、後、病没した時に現在の久昌寺に改めています。吉乃の方は茶毘にふされてこの寺に祀られています。この嫩桂山というのは、この寺に嫩(わかい)2本の桂の木があり、久しく昌(さか)えるという意味から嫩桂山と名付けられたと言います。

ここでお年寄りの(84歳とか)ガイドさんから説明を聞くが、記憶に残っていない。東浦ふるさとガイドの神谷さんは確か86歳なので、まだまだお若いと言える。しゃがれた声で一生懸命話しておられたことだけ印象に残っている。さっそく本堂裏手の墓地へ向かうと、大きな墓石がずらりと並んでいた。緑の水田に囲まれた墓地に初代から五代までの墓石と吉乃の方の墓石が、石を三段積み上げ少し高くした台座に並んでいた。



嫩桂山久昌寺



手前が吉乃の方の墓

ほかにも生駒家と思われる大きなお墓がたくさんあり、この地を支配した生駒家の権力をうかがい知ることができる。しかし、説明にあった「嫩(わかい)2本の桂の木」がどこにあって、いまはあるのかないのか分からなかった。

## このあと江南市のボランティアガイドと交流

防災センターの会議室で、江南市のボランティアガイドと交流をしました。発足は平成5年でこれまで会員の募集はしておらず、会員の高齢化もあり昨年初めて募集したと言う。そもそものスタートは大河ドラマ「信長」が放映されて、江南市へのお客さんが増えたことから、市が歴史ガイド養成講座をスタート。講座受講者19名と希望者を含め25名で発足した。会員は女性が多くて会長も女性、観光協会をベースに活動している。